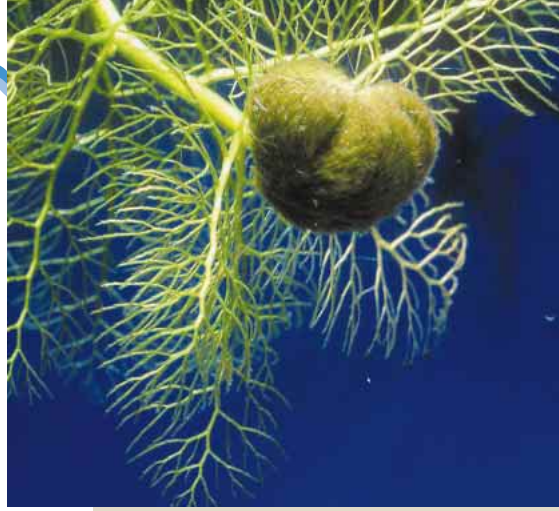
特集

水族企画展示

植物のある暮らし

―水生植物と憩いの空間―



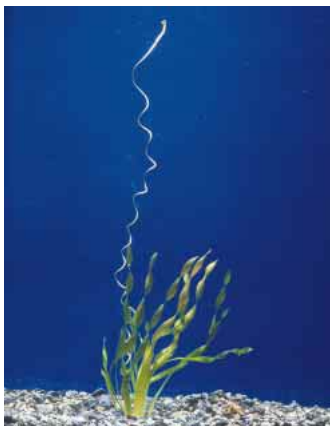
タヌキモの越冬芽

とても大げさな話から始まりますが…

40億年前、地球に生命が誕生したときは地球上には酸素がない状態でした。ある時、らん藻類の仲間、シアノバクテリアが突然変異によって光合成の能力を獲得したと考えられています。以後、数十億年をかけて地球の酸素は作られてきました。その間、酸素を作り出す藻類の繁殖と酸素を利用する生物の出現と進化により、人間を含めた現在の高等生物のすべての基礎が出来上がりました。水中に現れた原始植物は、4億年前には陸上に上がりシダの仲間や様々な草や木に進化していきます。そして一部のものが再び陸上から水中に戻り、水中生活を営む沈水植物になりました。

しかし、水中には陸に上がる前の植物たちもいるため、新旧が入り交じって生活しています。そんなわけで、水中の植物には陸上植物と変わらぬ繁殖生態を持ち、よく観察すれば、大変興味深い種類もあります。

例えば、琵琶湖の固有種として有名なネジレモの繁殖は、水底にある雄株の雄花が入った袋が花の時期に水底で割れて、花粉を乗せた雄花は水上に浮き分散します。その時、雌株からは、長いコイル状の柄のついた雌しべが伸びて、水面の花粉をキャッチします。水を介して受粉するので水媒花と呼ばれますが、陸上の風媒花と比べるとちょっと凝った方法を採用しています。



ネジレモ

タヌキモ類は、袋状の罠を身につけ、ミジンコなどの小動物を捉えて栄養源とする高度な技を持った水草です。滋賀県では、溜め池などで見ることが出来ます。暖かい季節に美しい羽毛状の葉を広げ繁茂しますが、寒くなると殖芽や種子を残して枯れてしまいます。

植物は動物より先に現れ、環境を整えたり動物の餌となって地球の生命全体を支えていると言って良いでしょう。動物が出現しない植物だけの地球というのもあり得たかも知れませんが、動物がさまざまな進化を遂げてゆく間、植物も仲間同士の競争に勝つために動物を利用した受精システムや、果実を作って動物にタネを移動させるような仕組みを発達させました。今の地球の姿は、動物と植物の見事な調和の世界となっています。

タヌキモのトラップ

タヌキモ

専門学芸員　秋山　廣光
（魚類病理学）
水生植物を接写中の筆者

水族企画展示

植物のある暮らし

―水生植物と憩いの空間―

7月13日(火)～9月30日(木)